

ドゥルーズにおける一義性 ―スコラ学概念による近世哲学の再定義をともなう「哲学の開始」

ドゥルーズは一義性の哲学者であると言われる。ドゥルーズの主著の一つであり、「初めて自らにおいて哲学を開始した」と言われている『差異と反復』はまた理論的な主著とも目される。『差異と反復』のなかで取り扱われている哲学的概念の一つである「存在の一義性」は、中世のスコラ哲学者・神学者であるドゥンス・スコトゥスの提唱した概念である。「精妙博士 *Doctor Subtilis*」と呼ばれる卓越した存在への眼差しを有するドゥンス・スコトゥスの「存在の一義性」に加えて、同じく一義性の哲学者としてドゥルーズはスピノザの名を挙げる。『差異と反復』における一つの定式として「永劫回帰は存在の一義性の定義である。」というものがある。ここにおいて、一義性を手掛かりとしてドゥンス・スコトゥス、スピノザ、ニーチェが結び付けられる。「差異にまつわる一義性」が反復の契機としてもっとも重要であるという理解が、ドゥルーズの永劫回帰解釈と結び合わさり、一義性を差異から捉え直すことが、『差異と反復』における最も主要であると考えられる主張と直接に関連している。特に、ピーター・ホルワードの『ドゥルーズと創造の哲学』においては、ライプニッツやベルクソンといった哲学者の一義性に連なる者と解釈され、この一義性がドゥルーズの哲学の最重要概念であることを端緒として個体化の原理、被知覚態といった哲学的伝統概念に基礎づける試みを行いつつドゥルーズの哲学を論じている。

そもそも、ドゥンス・スコトゥスの「存在の一義性」とは、トマス・アクィナスの「存在における類比 *analogia entis*」に対して提唱されたものである。人間には感覚形象における有限者の認識を通して「類比的な仕方において」無限者であるところの神を間接的にしかたどり得ないという「存在の類比」に対して、ドゥンス・スコトゥスは超越概念としての「存在者 *ens*」の概念は、有限者と無限者に、すなわち事象の世界と神の世界において「同名同義的に」つまり「一義的に」その述語として提示される、と考える。ここにスコトゥスの存在理解が表現されている。

「存在の一義性」のみならず、ドゥルーズは、スピノザ、ライプニッツといった近世の哲学者に対するアプローチにおいて、近世哲学のスコラ学からの強い影響の側面を、間接的とはいえ、浮き彫りにするような概念配置を行っていると理解できる。例えば、国家博士論文である『差異と反復』の副論文として提出された『スピノザと表現の問題』における概念として精緻なスピノザ読解はむしろきわめてスコラ的である。それは「実在的な *réal(le)*」ものにおける概念において、「即自的な差異にまつわる一義性（存在の一義性）が、存在を構成する（永劫回帰による反復によって定義される）」、という定式を始めとするように、「実在 *realitas*」に対する深い眼差しを備えていたトマス・アクィナスやドゥンス・スコトゥスに言及しながら哲学史そのものをいくつかの水準において再定義することが、ひいては「哲学の開始」の試みを、また「今日において哲学が可能である」と言わしめた『差異と反復』における思考を大きく支えている。